【豊かな体験活動　推進校】

ふるさとを愛する心を育てる体験活動

阿武町立福賀小学校

学　校　の　概　要

①　学校規模

○　学級数：３学級

○　児童数：２３名

○　教職員数：８名

○　活動の対象学年：全校児童

②　活動の観点などから見た学校環境

本校は、阿武郡北部の山間部に位置し、豊かな自然環境に恵まれている。近年、過疎化、高齢化、少子化が進み、基幹産業である農業の経営方法も変化してきた。今後は、地域開発の優れた担い手の育成、若者の定住、青少年の健全育成等、漸次教育的課題も多くなることが予想される。そのような中、学校教育に対する期待も高まり、保護者、地域ともに協力的な態度を示してくれている。

③　連絡先

○　〒７５９－０６１１

山口県阿武郡阿武町大字福田下1544番地

○　電　話：０８３８８－５－００１４

○　ＦＡＸ：０８３８８－５－０６５１

○　電子メール：fukuga-e@haginet.ne.jp

体　験　活　動　の　概　要

①　活動のねらい

○　地域の豊かな自然を再認識させるとともに、身の回りの環境、地域の特色への理解・関心を深める。

○　体験活動を通して、自他のよさを認め合い、見つけた課題を自らの力で解決し、主体的に行動する力を養う。

○　自然や人、文化（歴史）等とのふれあいを通して、感謝する心、感動する心など豊かな人間性を育てる。

②　活動内容と教育課程上の位置づけ

○　作物の栽培に関わる体験活動

・　田植え・稲刈り・収穫祭・米販売

（総合的な学習の時間・生活科　８時間）

○　花の栽培に関わる体験活動

（総合的な学習の時間・生活科　８時間）

○　文化・芸能活動に関わる体験活動

・　阿武町ふるさと太鼓

（総合的な学習の時間　３０時間）

○　地域の自然に関わる体験活動

・　水辺の教室

（総合的な学習の時間・生活科　４時間）

・　ふれあい遠足

（特別活動　６時間）

○　福祉に関わる体験活動

・清光苑訪問

（総合的な学習の時間・生活科　４時間）

１　活動に関する学校の全体計画

○　活動のねらい

・児童の発達段階に応じた、きめ細かな体験活動の設定

・地域との協力による教材・単元開発と体験活動の内容研究

・児童の内面の変化に視点を当てた評価方法の研究

○全体の指導計画

学年等	体験活動の種類・内容	期間・単位時間数	教育課程上の位置づけ	指導者
全学年	餅米づくり 田植え 稲刈り・はぜがけ 収穫祭・餅つき	５月～１０月 ８時間	生活科 総合的な学習の時間 特別活動（学校行事） 社会科	農業者 保護者
全学年	一人一鉢・花づくり 花壇・鉢に定植	６月・１１月 ４時間	総合的な学習の時間 生活科	教職員
全学年	水辺の教室	７月 ４時間	生活科 理科	教職員 役場職員
全学年	町内職場見学 自然体験 （ふれあい遠足）	１０月 ６時間	特別活動 社会	教職員 見学先職員
全学年	清光苑訪問	１２月 ４時間	生活科 総合的な学習の時間 道徳	施設職員 教職員
３・４年	すてきな場所作り	５月～１２月 ３０時間	総合的な学習の時間 国語・社会・道徳	担任 地域の方
５・６年	ふるさと太鼓に挑戦	１０月～１２月 ３０時間	総合的な学習の時間 音楽	担任 地域の方

２　活動の実際（実践事例：３・４年総合的な学習の時間「すてきな場所作り」）

○　事前指導

・　地域の様子について調べる。
（社会科：「まちたんけんをしよう」）

・　地域の自然を利用してできる活動について話し合い、計画を立てる。

○　活動の展開（全体活動：「すてきな場所作り」

・　基地作りと並行して取り組む、個人活動の計画をする。（土器作り、パン作り、竹の食器作り、草を使った和紙作り）

・　個人活動について担当者を決め、担当者は自分の活動について調べたり、計画を立たりする。

・　調べた内容を発表する。

・　それぞれの活動（土器作り、パン作り、竹の食器作り、草を使った和紙作り）で担当者にやり方を教えてもらいながら、活動に取り組む。

・　基地や活動別に作った物を生かして、他のクラスや保護者、地域の人々を招待する計画を立てる。

・　発表会・交流会を実施する。

○　事後指導

・　活動全体を振り返る（話し合い・作文・後片付けの計画）

３　体験活動の実施体制

〇　学校支援委員会

構成メンバーは、子ども会育成連絡協議会会長（学校評議員）、福賀ことぶき会会長（学校評議員）、ふるさと太鼓指導者、町役場職員（教育委員会・支所）、ＰＴＡ会長、校長、教頭、教務主任である。１８年度末に学校支援委員会を開き、１８年度の反省と活動報告、さらに１９年度の活動を計画する上で参考とするための情報交換をおこなった。１９年度は、１１月に１回目の学校支援委員会を開き、２月に２回目の支援委員会を開いた。１１月の支援委員会では、１９年度の活動報告と２年間の取組の反省、今後も活動を続けていく上での課題や地域人材の活用とネットワーク作りなどについて話し合った。２回目の支援委員会では２年間の活動報告とともに、来年度以降豊かな体験活動推進事業が終了してからどのように体験活動を継続していくかを話し合った。特に移動手段について協力を依頼するとともに、育友会、行政機関と学校が連携してできる新しい体験活動についても情報交換した。地域の自然や人と関わる体験活動をさらに充実していくことを確認した。

〇　配慮事項等

本校は公共の交通機関の移動が制限されているので、移動手段については、教育委員会と緊密に連携をとりながら、見通しをもって計画的に確保した。また、本事業への学校としての取り組みを評価していただくためには、その内容や取組の様子を知っていただくことが重要であると考え、学校通信、学級通信などを通じて学校の様子についての情報を発信している。安全面については、校外の活動の場合、事前の下見を必ず複数の職員が入念に行うことを心がけた。特に海・山林での活動では、危険箇所、危険動物への対応、野外トイレの設置など、地元の現地の詳しい方と情報交換しながら活動を実施した。活動場面よっては児童が鋸や小刀、金槌などを使用することもあり、使用方法についても徹底して指導した。

４　体験活動の評価の工夫と指導の改善

本校では、教育課程上の位置付けとして本事業の活動を総合的な学習の時間の内容としている。よって、評価については、主に本校の総合的な学習の時間の評価観点をもとに評価を行った。具体的な評価の視点としては「感じる心」、「追求する力」、「表現する力」、「生かす力」を設定して評価に臨んでいる。さらにこれらの視点をもとにして、各学級の活動ごとにより具体的な評価の視点を設けた。（例：〔感じる心〕福賀地域の事物や事象に関心をもち、自分なりの課題を見つけることができる。〔追求する心〕問題解決のための情報の集め方を知り、効果的に活用しながら、粘り強く取り組むことができる。〔表現する力〕調べたことを自分の思いも入れてまとめ、いろいろな方法で分かりやすく表現することができる。〔生かす力〕学習を通して得た知識や情報を自分達の生活に生かすことができる。）また、小規模校であるがゆえに一人ひとりの児童の様子が見えやすく、各活動終了後に全職員で児童の取組を評価する話し合いの場を設けた。また、児童の活動中の内面も把握できるよう、日記や作文の指導も行った。学校職員以外の指導者や受け入れ先施設の職員の方からも活動終了後、児童の取組について率直な感想や活動に対する意見を聞いた。学校評価用アンケートにも体験活動に関する項目を設け、評価材料として活用している。１９年度の活動が終了

した時点で、教職員と体験活動の中心的役割を果たした５・６年生にアンケート調査を実施し、２年間としての成果について検証する評価材料とした。

５　活動の成果と課題

１８年度の取組から、一人ひとりのニーズに応えるための教材・単元開発、児童の主体的な活動を引き出す工夫、体験活動の評価方法の検討などの課題が出てきた。そこで１９年度は、まず、一人ひとりのニーズに応えるために、より多様な活動を仕組みそれぞれが身に付けるべき力や克服するべき課題を解決するための場を多く提供できるようにした。基本的に各学級における生活科、総合的な学習の時間での活動を工夫し、各学年の発達段階や実態に応じた体験活動に取り組んだ。さらに少人数のよさを生かし、全校での学校行事も内容を見直して児童の活動の幅が広がるようにした。田植え・稲刈り活動に収穫したもち米を販売するお店作りの内容を取り入れたり、遠足をキャリア教育の視点からとらえ直して町内の様々な特色を生かした仕事にふれたりする内容で実施した。体験活動につながりをもたせ、相乗効果によって体験活動の価値を高めることもできた。体験活動がより充実してくると子どもたちの意欲も高まり、昨年度よりも主体的な態度が見られるようになった。特に高学年は自分たちに任されることが多くなったことの効果が大きかった。評価については、職員による観察、日記や作文、また児童の作品や各行事の感想発表の内容を通して評価をした。書く活動を継続的に行うことで児童の表現力が高まってきたため、昨年度よりも児童の様子や変化がとらえやすくなった。

２年間を通しての反省については、職員にアンケートを実施した。また、体験活動において中心的な役割を果たした現５・６年生についても質問紙による調査を実施し、実際に活動した児童の視点からも取組を振り返った。以下、それらをもとにした課題と成果について述べる。

児童数の減少、過疎化、高齢化が進む中、児童が家族以外の人とふれる機会や自然と触れ合う機会が少なくなってきている。このような現状に対し、様々な体験学習を通して地域のよさに気づき、自然環境を大切にする心、いろいろな人々に対する思いやりの心を育むことができたことは大きな成果であった。これは、本校の研究テーマである「ふるさとを愛する心を育てる体験活動」につながる成果である。さらに児童に対して実施した質問紙の結果を見ていると、ほとんどの児童が友だちのよさ、自分のよさ、地域のよさを知ることができ、学校や地域に誇りをもてたと回答している。また、友だちとの協力や地域の人びとを身近に感じることができたかという項目も、高い満足感を得ていることが分かった。一方、体験活動を自ら変えていこうという意識はあまりなく、現状で満足している実態も分かった。より質の高い主体性を追求することが今後の課題である。また来年度以降、児童数の減少による体験活動の見直しや、保小中の連携による体験活動についても取組みたい。